



# 図書館だより

2016.5  
No. 25

長崎県立大学佐世保校附属図書館

〒858-8580 佐世保市川下町123  
TEL 0956-47-2191 (代表)  
<http://sun.ac.jp/center/lib/sasebo/>

## 新聞を読もう

太田博道

(学長)

新入生諸君、入学おめでとうございます。4年間は決して長くない。就職のことを考えれば3年が勝負の時間です。卒業時に皆さんに求められるのは「社会人基礎力」です。これは経産省が提案しているもので、インターネットで簡単に検索できるので、早い機会に自分で確かめて下さい。

ある統計によると企業から見て学生に不足している力で、学生の自己評価との間のギャップが大きいものは、コミュニケーション能力、主体性、粘り強さ、一般常識等です。逆に業界の情報等は、学生諸君が気にしているほど企業側は求めています。

コミュニケーション能力とは単に会話ができるということではなくて、自分の意見を言うと同時に他人の意見にも耳を傾け、議論の中から何らかの方針を見つけ、一歩踏み出す力です。おしゃべりだけでは、何も生み出しません。これらの力を獲得するには、知識だけでは不十分ですし、「How to」ものの本を読んで身につくものでもありません。また、一朝一夕で高いレベルに達することも無理で、日常的な努力を続けることで次第に力がつきます。まさに「継続は力なり」です。

具体的にどうすれば良いか？一つの方法は、日頃から新聞を読むことです。図書館に行けば、数種類の新聞があります。新聞を読み比べることはとても面白いことです。自分で複数の新聞を定期購読するのはお金がかかりますが、図書館に行けば、読み比べが可能です。

日本語の記事を読んで概略を知った後に英字新聞を読むことを「粘り強く」続ければ、次第に辞書なしでも理解できることが多くなり、英語ではこんな風なのか、と英語のスキルアップも間違いありません。

日本語の記事だけでも各紙を比べてみると「一般常識」はもちろん、ある記事について自分ならこう考える、このことの原因は何か等と考えをめぐらせて、友人と話し合えば、「主体性」や「コミュニケーション能力」が自然に付いてくると期待できます。

皆さんの入学式の日々の新聞1面を見てみましょう。朝日の大きな見出しは「1万円札1.8億枚増刷」、「ギリシャ難民の送還開始」、「集団的自衛権の想定問答」です。毎日「抗がん剤価格上昇」がトップ、そして難民に関することです。読賣は「中高生の英語力目標以下」、2番目は「水俣病審査10年待ち49人」。全国紙3紙はそれぞれ全く違います。地方紙ではどうか？長崎新聞のトップは「消費喚起へ減税を」という経済諮問会議の提言がトップ。全国紙と地方紙では印刷の締め切り時間が違うことを考慮しなければいけません。この記事に関しては「時差」はなさそう。2番目は中高生の英語力に関する記事ですが、地方紙らしく「中高生英語力に地域差」となっています。西日本新聞のトップは「給付型奨学金自治体が先行」と自治体の取り組みを紹介し、それと並んで長崎新聞と同じく「消費喚起へ減税提言」です。最後に日経のトップは「原発安全4電力提携」、続いて「保育所の複数経営優遇」、「マイクロソフトとトヨタが新会社」と他と異質ですが、当然でしょう。新聞は速さでは他のメディアに敵いませんが、皆さんに必要な「解説」や「背景の説明、

掘り下げ」は優れています。

最後に新聞の文章をお手本にすると、分かりやすく読みやすい文章が書けるようになります。新聞では文章が短く、読んだ順番に理解できるように工夫してあります。最後まで読んで初めて全体が理解できるのでなく、途

中で読むのをやめても、そこまでに書いてあった情報はそれなりに理解できるのが新聞の特徴です。書いていく順番や論理の展開も含めて、これから皆さんが書くレポートのお手本として最も身近なものと考えて差し支えありません。

## 「検索」と「散策」

石田和彦

(附属図書館館長)

この4月から佐世保校附属図書館の館長に就任しました石田です。私の本来の仕事分野は、金融論の教員ですが、専門家である図書館スタッフの皆さんに支えてもらいながら、多くの方に利用しやすい図書館であるよう、運営に努めて参りますので、利用者の皆様どうかよろしくお願い致します。

さて、図書館長という仕事に就いて、改めて、本学における附属図書館の機能・役割ということを考えてみました。当たり前のことですが、大学図書館の第一義的な機能は、文献・資料等の「検索」で、これは本学においても何ら変わるところはないでしょう。学生の皆さんは、授業の課題・レポート、ゼミ等での調査・分析、卒論の作成等々、様々な機会に、必要な、あるいは関連する文献や資料を探すことを経験すると思います。図書館には、こうした「検索」のための道具立てが整っています。体系的な分類に従って配置された書棚は、それ自体が検索システムと言えるでしょうし、PCによる各種検索システムも稼働しています。

いまの学生の皆さんは、「検索」と言えば、すぐに、スマホやPCでの手軽なインターネット検索を思い浮かべ、わざわざ図書館に足を運ぶのは面倒に感じるかも知れませんが、インターネット上にある情報は玉石混交で、誤

りや意図的なウソもたくさん含まれています。レポートや論文を書く際には、必ず、信頼できる文献や資料に当たることが大事で、そのために大学図書館を徹底的に活用して頂きたいと考えています。

しかし、折角、膨大な量の本・雑誌等を所蔵している図書館です。こうした、言わば大学附属図書館として当たり前利用だけでは、もったいない気がします。たまには、「検索」の用事がなくても、何となく図書館の中を「散策」してみても、どうでしょうか。特に、自分の専門分野や、課題・レポート等で日頃から調べている分野ではない本が所蔵されている辺りを、並んでいる本を何気なく眺めながら歩いてみると（無論、静粛さを保つ等のルールは守ってですが…）、ふと、どれかの本に目が留まることもあると思います。本のタイトルや著者名だけでなく、時には、本の装丁や「雰囲気」に何となく惹かれることもあるでしょう。そうしたら、その本を手に取り、まずはパラパラとページをめくってみる、それで、何となく面白いことが書かれていたそうだったら、早速借り出して、読んでみましょう。期待通りに面白いこともあるでしょうし、予想を外すこともあるかも知れません。それでいいのです。

そのようにして幅広く本を読んだ経験は、いろいろなものを育ててくれます。自分の専門以外の分野への好奇心や興味、知識・理解は、それだけ人生の楽しさを広げてくれると、私は思います。佐世保校の学生の皆さんの専門である経済・経営とはほとんど関係ないこ

とですが、例えば、「この宇宙がどう成り立っていて、そこにはまだどんな謎があるのか」などに関心を持ってみると、いつも見上げる空が何となく違って見えるかも知れません。また、数学界の長年の懸案だった、いわゆる「フェルマーの定理」の証明に関わるドラマを知ってみると、授業で出てくる無味乾燥な数式も、少しは生きているように見えてこないでしょうか。そんな夢のような話だけではなく、時には、一見何の関係もない分野の知識が、実は自分の専門分野の課題解決に思わぬヒントを与えてくれることもあります。私自身の経験で一番面白かったのは、音楽CD

が登場した時に、その仕組みが不思議で、いろいろと関連する解説書などを読んだのですが、後に、経済時系列の統計解析に同じ原理が含まれていることを発見した時の驚きです。特に、本学の周辺には、何フロアもあって、1～2時間程度歩き回りながら、面白そうな本を探せるような大規模書店がなく、また、学生の皆さんにとっては、目に留まった本をすべて試してみることは経済的にも大変だと思いますので、ぜひ、大学附属図書館を、そうした人生を豊かに、面白くする「散策」の場としても、楽しく利用して頂きたいと思います。



## スウェーデンの 社会保障を学びながら

楊 光 洙

(実践経済学科教授)

私は、スウェーデンで社会保障について福祉財政の観点から制度、政策、意思決定システムなどを調査研究してきた。研究対象としてスウェーデンを選んだ理由は、福祉国家としてよく知られているスウェーデンという国はどのような過程を経て現在の社会保障に対する考え方や制度ができたのか（政策と意思決定システム）、よく言われている「高福祉・高負担」に対して国民は不満がないのか（福祉の便益と費用負担、財源調達）、そして高負担でも国民が政府の福祉政策を支持している理由はどこにあるのか（政策の持続性）など、素朴な疑問から始まったものである。

学術的に社会保障や福祉サービスについて、普段研究や講義はしているものの、今回は福祉の先進国であるヨーロッパの社会のなかで、自分が福祉サービスを体験（新しい世界への挑戦）しながら、その実態を具体的に調査するのが目的であった。これは、社会保障が学

術的に基礎があっても、実際の面では生活している社会事情が地理、歴史、伝統、政治、経済、文化などの相違によって、議論の対象や論理が異なるためである。いままでの認識（日本の社会事情と論理）で対応すると、実際のスウェーデン社会保障を充分理解することが難しいことや、大きな誤解を招く恐れがあると考えたからである。この意味で今回の海外調査研究は、非常に貴重な体験であり、有意義であったと言える。

言い換えると、大学はさまざまな経験を持っている先生たちから、いろいろなことが学べる場所である。この「多様性があるからこそ大学の良さが発揮できる」と、ストックホルム大学やストックホルム経済大学にて世界中から来た教授や研究者たちと交流しながら改めて確認したところである。大学で学ぶ内容は「理論」と「実際（現実）」の両面があるが、将来社会のリーダーになるためには、まず本をたくさん読んで理論（原理）をしっかり勉強することが重要である。目先のことにとらわれて安易に現実的な技術論の勉強に走らないことである。

また、大学時代は受動的に知識を受け取るのではなく、能動的に自らが調査研究しながら

ら他人と大いに議論し、様々な知識を自分のものとして積み重ねていくことが大事である。大学時代は人生のなかで一番活力のある時期であり、自らが考えて計画して行動し、体験しながら、その結果として成功と失敗を繰り返す時期でもある。自由に国内外を旅しながら

異なる社会を体験できることも、この大学時代の特権である。新しい世界への挑戦は、自らの視野を広げるチャンスでもある。柔軟性を持つ社会人になるために、学生の皆さんにもぜひ行動し、様々な体験をしてもらうことを期待したい。

## 独自学習に役立つ テキストの選び方 －税法文献を題材として－

高橋 秀 至

(経営学科教授)

大学図書館には、専門書が数多く配架されています。学生のみならず、図書館を活用し、学生生活を有意義なものにしましょう。ある専門分野を勉強するには、まず、その分野の基本書(テキスト)を読むことが大切です。図書館に足をはこび、自らが勉強しようと思う分野の基本書を探してみてください。例えば、税法であれば、『税法』または『租税法』というタイトルの図書を探すと、本棚には、数多くの基本書がならんでいます。代表的なものをあげると、清永敬次著『税法』(ミネルヴァ書房、2013年)、金子宏著『租税法』(弘文堂、2016年)、中川一郎著『税法学体系』(ぎょうせい、1977年)、田中二郎著『租税法』(有斐閣、1990年)、谷口勢津夫著『税法基本講義』(弘文堂、2016年)、水野忠恒著『租税法』(有斐閣、2011年)、北野弘久著『税法学原論』(青林書院、2007年)、松沢智著『租税法の基本原則』(中央経済社、1983年)、波多野弘著『租税法概論講義』(清文社、2015年)、増田英敏著『リーガルマインド租税法』(成文堂、2013年)、岡村忠生・渡辺徹也・高橋祐介著『ベーシック税法』(有斐閣、2013年)、金子宏・清永敬次・宮谷俊

胤著『税法入門』(有斐閣、2016年)などがあります。

それでは、最初に読む文献としては、どのようなものが良いのでしょうか。私が学部の講義で使っているテキストは、金子宏・清永敬次・宮谷俊胤著『税法入門』です。本書は、文庫本(有斐閣新書)で頁数も少ないため、一見すると初心者にも最適な感じがします。確かに文章は読みやすく工夫されていますが、少ない記述で税法全体を説明しようとしているところから、本書を読むだけで税法を理解するのは難しいと思います。本書を基に講義を受けるか、もしくは他の基本書を合わせて読むなどの工夫が必要です。

私が大学院の講義で使っているテキストは、谷口勢津夫著『税法基本講義』です。本書は、タイトルに「基本」という字句が含まれていることから、初心者向けのように見えます。しかし、本書は税法の基礎理論を深く研究した成果をまとめたものであり、他の基本書で一通り税法を学んだものが読むのに適した文献です。

私が学部のゼミで使っているテキストは、金子宏著『租税法』です。本書は、1,000頁を超えるもので価格も高価です。学生の皆さんは、取っ付きにくいと感じるかもしれませんが、独自学習には、詳しく解説されている分厚い本の方が良いと思います。また本書は、脚注にて多くの参考文献および裁判例を示しており、参考文献等を探すのにも適しています。

独自学習のために文献を探すには、タイト

ル、価格または読みやすさに安易に惑わされてはいけません。また、基本書といえども、著者ごとに見解が異なる部分も多々あります。1冊の本のみに頼るのではなく、数多くの基

本書を読むことをおすすめします。図書館の棚にならんでいる本を片っ端から読んでみると面白いですよ。

## タシケントと イスタンブール

－自己紹介と書評を兼ねて－

江崎 康弘

(国際経営学科教授)

昨年10月に経済学部(当時)に着任し、本年4月より経営学部国際経営学科所属となりました。本学着任まで、日本電気(株)(NEC)に長く勤務してグローバル事業に関与し数多くの海外経験を積んで来ました。ロンドン駐在3年間を含め渡航国は45か国以上に及び、その多くを契約交渉に携わってきました。専門分野は国際コミュニケーション論、比較経営論、交渉戦略論です。学生時代より読書は好きな方でしたが、海外出張が多くなると長時間のフライトでの移動時間が将に読書に最適な空間でした。今でも年間100冊程度は読んでいます。これらを踏まえ2冊を紹介したいと思います。

鳶信彦著『日本兵捕虜はシルクロードにオペラハウスを建てた』(角川書店、2015年)

ウズベキスタンの首都タシケントにあるナボイ劇場は旧ソ連の四大劇場の一つとされたオペラハウスである。いまも同国の誇りである壮麗な劇場を建てたのは当地に抑留された日本兵捕虜達であった。1966年に当地を襲った大地震にも耐えた堅牢な造りと美しい内装。日本人捕虜の誇りと意地をかけた仕事は、現地の人々の心を動かし語り続けられている。

私事だが、20年ほど前に日本政府援助案

件(ODA)で初めてタシケントを訪れた際に知らされた史実であり、非常に親日国である同国の歴史的な背景に頷いた次第である。(原著の最終節より)

1966年4月26日、タシケントを震源地とする直下型大地震が発生し街はほぼ全滅した。しかし、ナボイ劇場だけは殆ど壊れず悠然と美しく建ち続けていた。

「さすがナボイ劇場だ。あの時働いていた日本人の技術は本当に素晴らしかった。」という声が街中に広まった。「捕虜なのに、なぜ一生懸命に仕事をするのだろう。普通なら捕虜というのはもっとサボるのに…と不思議がっていた。その仕事の確かさ、丁寧さ、真面目さはいつになっても変わらないので、そのうちウズベキ人の眼差しが敬意の念に変わった。」(当時を知るナボイ劇場館長)

劇場裏手の外壁に埋め込まれたプレートには以前ウズベキ語、ロシア語、英語で「日本人捕虜が建てたものである」とあったが、



1991年の独立時のカリモフ大統領が「ウズベキは日本と戦争をしたことがないし、ウズベキが日本人を捕虜としたこともない。」と指摘し、「捕虜」という単語を削らせ新しいプレートを作らせた。

そこには「極東から強制移送された数百名の日本国民が、この劇場の建設に参加し、その完成に大きく貢献した」とし、言語もウズベキ語、日本語、英語、ロシア語の順となった。ナボイ劇場を訪れる日本人はこのプレートを見るが、これを読む日本人の大半はその史実を知って涙するという。

黒木亮著『リスクは金なり』（講談社文庫、2013年）

本著のなかにイスタンブールのボスポラス海峡に関する一節がある。私自身も15年ほど前に幾度となく訪れたが、当時の印象と著者の描写が一致したので紹介したい。

「ボスポラス海峡は黒海とマルマラ海を結び、その先はダーダネルス海峡を抜けエーゲ

海に繋がっている。欧亜の境にあり、昔から戦略的、商業的要所として栄えてきた。周辺の地形は変化に富み、大変美しい景観である。特に青く澄み切った空にブルーモスクの尖塔がそびえ、トプカプ宮殿の新緑が栄える初夏がイスタンブールの美しい季節である。」

安倍首相も数回トルコを訪ねているが、この海峡にかかる「ボスポラス海峡第二大橋（1988年完成）」や海峡の下を通る「鉄道用海底トンネル（2013年完成）」が日本のODAで施工された。さらにControversialではあるが三菱重工／仏アレバによる原発、三菱電機による通信衛星等、この地をめぐるパッケージ型インフラ輸出商戦は熱くなっている。



## 学生に勧めたい1冊

遠藤周作著『沈黙』（新潮社、1981年）

西岡 誠 治

（公共政策学科教授）



本年7月の世界遺産登録が有望視されていた「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」の申請延期がこの2月に発表になった。当初目論んでいたキリスト教の「伝来、弾圧、潜伏、復活」というプロセス

に世界遺産としての「顕著な普遍的価値」があるとするわが国の見解に対して、ユネスコ

の諮問機関であるイコモスが、「弾圧と潜伏」に限ってしかその価値を認め難いとしたために、2年後の再申請に向けて練り直す方針だと報じられている。

ここにご紹介する遠藤周作著『沈黙』は、その世界の宗教史においても類がないとされる長崎におけるキリスト教の「弾圧と潜伏」の、江戸初期の実態を題材として書かれた小説である。小生は大学生であった1980年頃、長崎に務めていた仏教僧の伯父の勧めで本書を手にし、その重厚さと精神性に圧倒されたのを鮮明に記憶している。この度読み直して、当時の感銘と共に、弾圧されたキリスト者の生き様の凄まじさに感慨を新たにした。

物語の舞台は、島原の乱が収束して間のない17世紀の長崎である。主人公であるポルトガル人司教ロドリゴは同僚ガルベとともに

恩師フェレイラが日本で過酷な弾圧に屈して棄教したとの知らせに触れ、マカオから五島経由で長崎に潜入することになる。案内をしたのは、キチジローという何事にも自信が無く卑屈に振る舞う長崎出身の男であった。

長崎に到着したロドリゴは、当局の取り締まりの中、幾度も貧しい信者達によって危機を救われ、逆に彼らの心の支えとして活動していたが、遂にはキチジローの密告によって捕えられる。

牢獄の身となったロドリゴの周囲では、信者達が棄教を拒んで無惨な死に方をして行く。それに対して、なぜ「あの方」が沈黙しておられるのかが、ロドリゴには無念でならない。それでも、自分は最後まで意志を強く持って殉教の覚悟でいたところに、棄教した恩師フェレイラが現れる。その後のやり取りの委細は読んでいただくことにして、最終的にロドリゴは奉行所の中庭で踏絵に足をかけ、キリスト教を棄てることになる。その際、始めて彼は踏絵の中のキリストが「踏むがよい」と呼びかける声を聞く。さらに、「私は沈黙していたのではない。一緒に苦しんでいたのに」とも。

物語を読み直してみて、主人公と共に中心的な役回りを演じているのが、実は弱者であ

り裏切り者でもあるキチジローであることに気付かされた。当局から迫られればさっさと棄教し、奉行に脅されれば司祭を裏切って密告まで行うキチジローの卑怯な弱さをロドリゴは憎み侮蔑するが、キチジロー自身はそれでも神の救いを求めてロドリゴの周囲に現れては消える。著者は、このキチジローは自分の分身であると語ったと伝えられている。悪事をなさざるを得ない弱者にこそ、人間存在の本質（悪人正機）を見ようとした点を興味深く感じるとともに、真宗僧侶の伯父が本書を勧めた理由を、今更ながら合点した。

現在、ハリウッドでは巨匠マーティン・スコセッシ監督による本書の映画化が進められており、この秋にも公開予定とのことである。このことは、本書の取り扱う主題が、宗教・宗派に加えて国境をも超える普遍性を備えている証左と言えるであろう。

図書館には、本書の他にも「日本人とキリスト教」というテーマに貫かれた大著のほか、狐狸庵先生のニックネームで書かれた軽妙なエッセーなどの遠藤作品が多数所蔵されている。カトリック作家としての重厚さと、ユーモアを売りにした流行作家としての軽妙さの両面を兼ね備えた氏の魅力に、皆さんも一度は触れてみられたらいかがだろうか。

## 学生に勧めたい1冊

大藪千穂著

『新版 お金と暮らしの生活術』  
(昭和堂、2011年)

田村善弘

(実践経済学科准教授)

「お金」は生きていくうえで必要なものの1つです。私たちは日常生活の様々な場面でお金と関わっています。大学まで通学・通勤を例にとると、電車やバスの利用時には運賃と

いう形でお金を払い、定期券利用の場合も購入時にはお金を払っています。このように、お金は日々の生活と密接に関わっていますが、生活とお金の関係をじっくり考える機会は少ないように思います。これに関連して、今回は大藪千穂著『新版 お金と暮らしの生活術』(昭和堂、2011年)を紹介したいと思います。

本書は、I.暮らしとお金、II.家計とライフプラン、III.安全性をめぐる消費者問題、IV.契約をめぐる消費者問題、V.21世紀のライフマネージメントの5つの章から構成されています。内容から難しい本という印象を受けが

ちですが、著者が「なるべく1ページぐらいに項目を区切り、読みたいところから読め、かつ大切なことは抜けないように心がけました。」(iページ)と述べているように、1つの項目が2～3ページにまとめられています。また、項目ごとに内容が完結しているのです、どこから読んでも問題はありません。

では、中身を少しみておきましょう。I.とII.は暮らしとお金に関する内容です。I.の「暮らしとお金」では、お金とは何かから始まり、家計の支出と収入・家計簿に関する内容が多くなっています。II.の「家計とライフプラン」では、生まれてから死ぬまでにおよそいくらかかるのかが、ライフサイクル別に述べられています。

III.とIV.は消費者問題に関する内容です。なかでも、安全性と契約に関する内容が取り上げられています。III.では「安全性をめぐる消費者問題」として、消費者問題とは何かということから始まり、食品の安全性、表示などの内容が取り上げられています。IV.は「契約をめぐる消費者問題」として、契約とは何かから始まり、悪徳商法、クレジットカード、消費者金融とお金に関わるトラブルなどについて述べています。

V.は「21世紀のライフマネージメント」として、時間管理の問題、環境家計簿などについて述べています。

本書を読んだ後では、私たちの生活がお金と切っても切れない状況になっていること、お金にまつわる様々なトラブルが決して他人事ではないということを改めて実感することでしょう。では、トラブルに巻き込まれない

ようにするには、どうしたらよいのでしょうか。

結論からいうと、「知る」ということが重要です。今も昔も「食品偽装」など、食料の消費に関するトラブルは常に起きています。そのため、様々なことを「知り」、判断材料を多くもっておくことが重要です。特に、食料消費は私たちの消費生活の基本となるものですから、食について「知る」ということは、食費を有効に使うということにもつながるのではないかと考えます。

本書はお金と生活に関心がある人はもちろんですが、特に1人暮らしを始めた人に読んでほしい1冊です。ただし、1つ注意が必要です。消費生活が目まぐるしく変化しているように、本書にある内容も時々刻々と変化しています。当然、出版時点から変化した内容もあります。本から情報を得ることに加えて、その内容がどう変化しているのかを見る必要があります。自分自身が得た情報を吟味し、どう活かすかを考えることが次のステップとして重要です。こうした姿勢は大学生活において、どのように学ぶかということにもつながることだといえます。



◆附属図書館HPアドレス <http://sun.ac.jp/center/lib/sasebo/>

- 当館は本学学生以外の方でも県内にお住まいの15歳以上の方は利用できます。
- 開館時間／平 日：午前8時30分～午後10時まで(学生の休業期間中は午前9時～午後5時まで)  
土曜日：午前9時～午後5時まで  
休館日：日曜日・祝祭日・開学記念日(6/4)

編集・発行責任／長崎県立大学佐世保校附属図書館運営委員会 発行日／2016年5月27日